

## 歴史の歪曲への反論

遠山 武

戦後六十六年が経過し、二十世紀に二度も世界大戦が戦われたことすら知らない若者もいるようになった。今日、近現代の戦争の歴史を正しく知り、これからの世直しに生かすことが求められる。

いま、民主党政権が、一部の人たちの恣意で大騒ぎし、国民の要求とかけ離れた政治を行っている。十五年戦争（一九三一年の柳条湖事件に端を発して一九四五年度の終戦までの戦争）も、軍部の恣意的行為・侵略行為で進められたと言つてよいのではないか。

二〇〇八年十月、田母神元航空幕僚長が、懸賞論文に「日本は侵略国家であったか」を応募して最優秀賞を得た。そして、一部マスコミやある傾向の人たちは彼の存在を歓迎している。しかし、同氏の論文は、欺

瞞に満ち満ちていると思う。同論文が「我が国は蒋介石により日中戦争に引きづりこまれた被害者なのである」と述べていることに反論したい。

一九三一年（昭和六）年九月一八日、日本自身が中国で経営する鉄道、満鉄の線路を柳条湖付近で自分で爆破した（柳条湖事件）。これを中国のしわざだと偽り、満州に攻め込んだ。多くの日本国民は、これを信じた。これが満州事変である。これは戦争であるが、日本は自国の権益を守るための行為で戦争ではないと見せかけるため、事変と呼んだ。これは偶発的事件ではなく、中国の東北三省（日本の約二倍の面積）を占領するため、日本の日本軍の計画的行動だった。あしかけ十五年におよぶ日本の中国侵略の開始であり、中国の日本に対す

る抗日戦争の始まりでもある。

この頃、中国では、蒋介石（中国国民党の首領。中国共産党を弾圧。一九二七年に南京に国民政府を樹立した。一九三七年七月、盧溝橋事件⇨中国の川にかかる橋・盧溝橋付近で演習中の日本軍が、中国軍と衝突した事件に端を発した日中戦争が始まると、中国共産党と和解し、抗日戦争を指導した）のひきいる中国国民政府は、中国共産党を討伐することに懸命だったので、日本軍と戦う余裕がなく、日本軍はたやすく満州を占領することができた。だが中国民衆の抗日救国運動はしだいに高まっていく。日本は満州を中国から切り離し、「独立した国」にしたてあげようともくろんだ。日本の満州侵略に対する国際世論をかわすために、一九三二（昭和七）年一月、日本は上海で事件を起こし、戦争を開始した。これを田母神氏は「我が国は蒋介石により日中戦争に引きずりこまれた被害者なのである」と述べ、日本は加害者なのに被害者のように述べている。加害者である証拠をもっと上げよう。

太平洋戦争の敗戦直後、日本人が満州から逃避行中のことである。牡丹江（中国の地名）で居残っていた日本人を殺し、略奪を働いた中国人下男が言う。「日本

人は私の父を殺し、母と姉を強姦した。私の妹をさらっていった。日本人は私たちの家を焼き払った。私たちの土地を奪った。私たちは牛や馬みたいに働かされ、使えない物にならなくなったら順番に殺される。これ、私だけではない。満州で一杯あった話。王道楽土、嘘ばかり、五族協和、嘘ばかり。日本人は満州を焼きつくし、奪いつくし、殺しつくした。私にはこの家をもらうくらいの権利はある」（高橋健男著「赤い夕陽の満州にて」）は、まぎれもなく、日本は加害者⇨侵略者だったことを示している。

また、日本から満州へ送り込まれた開拓団についても、持ち主のない荒地を開墾したわけではなく、現地住民を追い払って既耕地を奪い、日本人の土地を確保したものが大部分だったことを示す次の証言もある。入植地確保に従事した日本人関係者の証言である。「満鉄の傍系会社・東亜勸業株式会社」が土地の買収に当たったが、中国農民の意向に関係なく、軍の威圧の下に強制的に土地を買収していった。買収価格は、時価の3分の1、5分の1という値段で買収した。地券を出ししるる農民には、隠してある地券を兵士が銃剣で壁を壊して探し出し、取り上げるといふ手段が取られた。

第二次移民のために取り上げられた土地の七一％は既耕地だった」（同書）。これらの証言からすれば、田母神氏の「我が国は…被害者なのである」は、とても信用できない。

しかし、これら証言は信びよう性に欠けると田母神氏は言うかもしれない。そこでこの頃の歴史を振り返ってみる。

一九三二年三月一日、日本軍の策動で「満州国」が建国宣言。しかし、国際連盟は、「満州国」を独立した国家と認めず、日本はそれを不満として翌年、国際連盟を脱退し、満州国は独立した国家だと主張しつつ、日本から「満州国」に移民を送り続けた。この年の五月一日、犬養毅首相が暗殺された（五・一五事件）。これは日本の軍の一部と民間団体の一部が、表向きには「政治の腐敗一掃」「国家改造」を建前として叫びつつ、軍部独裁で、侵略戦争拡大をめざしたクーデターだった。

「満州国」建国の頃から日本の政治は、軍部独裁になったことを昭和十二年に第一次近衛内閣を組織した近衛文麿首相（当時）が著書「失われし政治」で述べている。「昭和十二年七月組閣に着手、…陸軍の国政干渉は増大の一途をたどった。…陸軍大臣現役制（陸

軍大臣に、現役の軍人を就かせる制度）が厳として存在し、いかんともし難く、一応、自己の信念を吐露するにとどまった。したがって同一内閣の一員として発足すべき陸軍大臣は全く超内閣的存在であり、ただ陸軍内部の意見を国策として発表すべき連鎖であるとともに、内閣の死命を制する存在であった」のだ。

更に驚くべきことは、近衛文麿首相が全く政治の力ヤの外であったことである。「私が大命を拝した（一九三七・昭和十二年六月四日、首相に就任したこと）頃は、既に満州事変以来、陸軍がやった諸々の策動が次第に実を結び、大陸では既に一触即発の状態にあつたらしく、私も支那（中国のこと）問題が武力を用いるほどに深刻化していることも、むろんわからず、組閣後、わずか一カ月を出ずして、盧溝橋事件へと発展したのである。当時、かかる事件が勃発することは政府の人はもちろん、一向知らず、陸軍の本省も知らず専ら出先の策謀によつたものである。」（同著書）

この文書は敗戦直後、一九四五年十二月、近衛文麿が軽井沢において、従来部分的に書きとめていた記録を基礎に補足完成したものであるが、戦犯容疑者として拘置所に拘禁されるのを目前に、既に自殺を決意し

ていて「自分の政治の偽らざる告白」と述べ、この後  
すく、同年十二月十六日、戦犯裁判にかけられる前に  
自殺した。だから裁判で有利な判決を得るために書いた  
文書ではないはずである。本音Ⅱ事実と見るべきであ  
らう。

同書は通り一遍の告白ではない。非常に具体的に陸  
軍の暴走が書かれている。

（一九三七Ⅱ昭和十二年七月、盧溝橋事件直後）、特  
別議会開会中の院内閣議で大谷拓相（満州開拓のため  
の大臣）をして陸軍大臣に質問せしめたところ、この  
質問に陸相は黙して答えなかつたところ、米内海軍大  
臣があつさりと『それは永定河（中國の川の名前）と  
保定（中國の地名）の線で停止することが大体におい  
て決定した。』と言つと、陸相はたちまち顔色を変え  
『こんな場所で言うては困るではないか』（軍関係者以  
外の者がいる閣議で軍の秘密を漏らすな、という意味）  
と米内海相を怒鳴りつけた。閣議においてもかくのご  
とく、私もまた、種々方途を用いて陸軍の意向を確か  
めんとしたが、なんらの確なものも把み得ず」として  
いる。文民統制は全く効かなくなつていたのである。

（とおやま たけし・新潟市在住）

## 「忠魂碑」と女先生

私が国民学校に入学したのは昭和19年（1944）  
4月、担任は丸顔で眼鏡をかけた体格のいい女先生  
だった。

半世紀以上も前のことなので、その頃の記憶は定  
かでないが、今でも鮮明に残っていることがある。

村には大きな集落が三つ、夫々に学校があつて中  
央の集落に忠魂碑があつた。その参拜のため、往復  
8kmの砂利道を草履履きで2列縦隊で歩かされるの  
は一年生には辛いものだった。その帰り道のこと、  
クラスでも腕白で餓鬼大将だったM君が列を離れて、  
歩いている子達にチョツカイをだし、列を乱して面  
白がっていた。

帰校後、女先生が教室の後ろにM君を引つ張り出  
していきなりぶん殴つた。そして、ひっくり返つて  
倒れたM君を足蹴にしながら、「天皇陛下、戦死し  
た兵隊さんに申し訳ないではないか……」というよう  
なことを言いながら竹の指示棒で何回もはたいてい  
た。M君は泣きながら転げまわつた。普段はみんな  
から怖がられていたM君だったが、そのときは可愛  
そうに思つた。

その女先生は今も健在（88歳）とかで、昨年、同  
級生の有志が尋ねようと企画したが、先生の健康上  
の理由で実現しなかつた。

（K・K）